

NY 発

NPT 再検討会議 代表団ニュース



第5号 2015年4月30日

〒150-8913

東京都渋谷区渋谷3-29-8 ユーブプラザ 11F

日本生協連 組合員活動部

TEL: 03-5778-8124

FAX: 03-5778-8125

4月29日の活動 ニューヨークでの活動の最終日です。

・学校などでの証言活動

☆1班 日本女子大学 桜楓会NY支部・公開イベントでの証言活動

この証言活動は、日本女子大学のOBをはじめ、一般の希望者も参加可能な公開イベントとして開催されました。6人の参加者に対して、被爆者の木村さんが「被爆者は訴える」と題し自身の体験談を証言、その後二世として蛭名さんが「被爆二世としての責任」と題し証言を行いました。

参加者からは「塾の講師をしている。小論文の題材として原爆が取り上げられることがあり、生徒にどのように歴史の事実を伝えていくか、直接話を聞いたかった」「日本はなぜ、核を断ち切る事ができないのか、アメリカで生活していてよく聞かれるが、明確な返事ができない。断ち切ることができれば、海外に対し強くものが言えるのではないか」等の声がありました。これに対し、「原爆は人の心を変えてしまう。語りべをすることはつらいが、子や孫に同じ思いをさせたくないから、どこへでも行って証言している。核は人間が作ったもの、天災ではない。広島・長崎を知って平和を考えて欲しい」と話しました。



証言する木村さん

☆1班 国連国際学校での証言活動

木村さん、被爆二世の蛭名さんが証言を行いました。

質疑応答では、原爆の威力、原爆の落下を目撃した人はいるかどうか、被爆後の街並みについての質問などがありました。これらに対し、「原爆は上空580mで爆発した。強力な爆風で、大きなビル以外は何も残らなかった。落下の様子を見た人がいるかは定かでないが、落下傘が落ちてきたと話す人がいた。B-29はひんぱんに飛んでいたが、それまで爆撃を全く受けていなかったもので、空を見上げる人は誰もいなかったと思う。原爆は本当にいけないもの、子や孫に同じ思いをさせたくないと思う。みんなで核廃絶に向け、共に頑張っていきましょう」と話しました。

また、「この先、何をすれば良いのか?」という質問もあり、被爆、核兵器が「0(ゼロ)」になるまで、こうした証言活動をはじめとした活動を世界中で続けて行かなければならないと改めて感じました。今回このような活動をサポートでき本当に良かったです。



証言する蛭名さんと木村さん

☆2班 モントクレア州立大学での被爆の証言

参加者は7人で、予想したよりもずっと少なかったのですが、その分一人一人が真剣に話を聞いている印象を受けました。また、刺激的な場面の説明があっても、目を背けることなく話を聞いていました。



被爆証言をする木戸さん

☆4班 アベニュースクールでの証言活動

通訳を介して証言するのは初めて、と証言メンバーは話していましたが、呼吸が合い、順調に計2時間30分のセッションが終わりました。

合計約100人の高校生に向けての証言で、学生たちもこれまで学習してきたことを披露し、原爆が爆発していた時間46秒間の黙祷を挟むなど、セッションは学生たち中心に進みました。

質疑応答では、「日本の子どもたちはどのようにヒロシマ・ナガサキについて学んでいるのか?」「ヒロシマからナガサキまでの間の3日間の反応は?」「今のアメリカでは核のことはあまり話に上らない。どうすればよいか?」など、これまでの2日間の小中学生とは異なり、核兵器の社会的影響や現状への理解ということへの質問が多くありました。

終了後のレセプションには生協のメンバーも参加して、学生たちと日本についての交流を深めることができました。



コープみらいからの折り鶴やカードを生徒に渡す生協メンバー

☆6班 ラガーディア・コミュニティカレッジでの証言活動

ニューヨーク州ロングアイランド島にあるラガーディア・コミュニティカレッジで証言活動を行いました。参加者はおよそ150人で、教室に入りきれないほどでした。最初に中村雄子さんが自ら描いた絵を見せながら、被爆直後の様子や親友を失った悲しみを伝え、最後に峠三吉の詩をメッセージとして英語で伝えました。

福島さんは、生後7か月で被爆し親戚宅に預けられ、大変辛い思いをされたこと等を透き通った美しい声でお話されました。

谷口さんは静かに切々と語られ、聞く側に訴えかける力を感じました。一番印象的だったのは、学生からの質問で「今回の訪問でアメリカ政府から公式な謝罪がありましたか?」の問いに谷口さんが「謝ってもらいにきたわけではない。核兵器廃絶を求めるにやってきたのです」という毅然とした返答に、会場から自然と拍手が沸き起こったことです。今日の証言会で「事実を知る」ことがきっかけとなり、さらに戦争の恐ろしさや平和の大切さを学ぼうとする学生が増えることを期待しながら、日本の子どもたち、若者たちに対しての「知る機会」をもっと作らないといけないと思いました。

全体のコーディネートは、被団協代表団の現地ボランティアスタッフでもある同校教授の遠山京子さんが進められました。



証言の様子

☆8班 リバーデイルカントリースクールでの証言活動

日本の文化を学ぶ授業を履修する高校生の授業の中で証言活動を行いました。6人の高校生たちは、先生の補助を受けながら日本語での証言を熱心に聞いていました。証言を聞くにつれ、歴史や世界情勢について強い興味を持ったようでした。

今回の証言活動では、NPT再検討会議についても触れました。生徒たちは自分たちのすぐ近くでそのような会議が行われていることに驚いており、世界に向けての発信がまだまだ足りないことを痛感しました。授業の中でこのような場を持つとする学校の姿勢から、現地の先生方の、未来に向けての熱い思いを感じ取ることができました。



被爆の証言を聞く生徒たち

☆10班 国連国際学校での証言活動

参加人数は36人で、最初に生徒さんによる歓迎挨拶があり、3人の被爆者が証言を行いました。

その後の質疑応答では、①「みんなの前で話をすることを決心したのはいつなのか」②「アメリカに対してどんな思いを抱いているのか」の二つの質問が、それぞれの被爆者に投げかけられました。質問②に対する、今井さんの「私はアメリカ人を恨んでいませんが、核は恨みます。皆で核をなくしましょう」という答えが印象的でした。



証言した被爆者と証言に集った生徒

☆11班 国連国際学校での証言活動

国連国際学校のアフタースクールの時間に小学生とその保護者、約30人に対して証言活動を行いました。子どもたちは、長い間静かに話を聞いており、保護者の方も被爆者の方の資料を読んで関心を示していました。証言が終わった後も個別で小学生が被爆者の話を聞きにきたり、集合写真を撮ったりするなど、被爆者と小学生が交流しました。

小学生にとって少し内容が難しかったかもしれませんが、保護者には十分伝わったようでした。このような経験が子どもたちに広く伝えられていくことによって、平和への取り組みそのものが継承されていくのだと改めて感じました。



証言後、子どもたちと被爆者で集合写真

☆13班 メリーマクドウェルフレンドリー中学校での被爆の証言

8年生3クラス、先生を含め56人の参加でした。被爆二世の柿田さんと、被爆者の中山さんにより被爆の証言をおこないました。生徒たちは学習障害がある方たちでしたが、落ち着いて真剣に話を聞いていました。被爆者の核兵器廃絶に対する思いに触れ、生徒たちからはたくさんの質問がでました。

この学校では、講演会等で話を聞いた後、落ち着いて考えるための5～10分の「モーメントサイレンス」という時間を設けています。今回の証言でも時間を取り、生徒や先生から考えたことの発言がありました。最後、中山さんは自ら生徒たちのもとへ歩み寄り、ひとりひとりと抱き合い、握手をかわし思いが伝わる交流となりました。

学習障害がある生徒たちと聞いていたので、被爆者の話を落ち着いて聞くことができるのか心配しましたが、誰一人騒ぐこともなく真剣に被爆者の話を聞いていました。また、質疑応答では積極的に手が上がり、たくさんの質問がでました。被爆者は丁寧にわかりやすく質問に答えていました。最後に、被爆者と生徒が握手をかわし抱き合う姿はとても感動的で、心と心の交流ができたことを嬉しく思いました。

政治や経済ではなく、人と人の心の交流こそが、核兵器廃絶を実現する唯一の道であることを実感しました。



生徒と抱き合う中山さん

・国連本部ロビーで開催中の原爆展での「被爆の証言」

☆2班 原爆展での証言活動（10時～12時）

来場者の約半数が日本人でしたが、多くの海外の方も足を止めて、パネル展を見学したり、被爆証言を聞いていました。また、記者の方も多く被団協の方のお話にカメラを向けていました。

日本人中学生に第一印象を聞いてみたところ、答えは「怖い」でした。怖いものに出会った時、ますます興味を持つ人と、何も知りたくなくなる人とがいます。こういった観点からも、子どもたちに何をどのように伝えていくかが難しいと感じました。



原爆パネル展で被爆体験や核兵器の恐ろしさを語る斎藤政一さん（写真中央）

☆14班 原爆展での証言活動（12時～14時）

見学者にこちらから声をかけ、交流を進めるよう工夫しました。被爆者が通訳を通して体験を話しました。

会場を訪れたインドの親子に話を聞くと、「原爆は知っているが、核の本当の恐ろしさは知らない。インドに帰ったら、このことを子どもたちに伝えたい。インドも核の保有国だが、保有国が増えているので、抑止力にはならない。だから、自分は反対だ」。フランス人男性の2人連れは、「地球温暖化を考えると、一概に原発が悪いとは言えないと思う」。ドイツの2人連れは、女性が写真を観て泣いていらっしやり、「福島事故があったのに、日本は原発を廃止しないのか？ドイツは、2020年までにメルケル首相が廃止すると宣言しているのに」。国連職員の方は「国連で広報を担当し国連の中を案内している。原爆展についても説明しているのだが、来場者に自分が伝えられることはあるだろうか？日本は、現在、原発が動いていないが、エネルギーは足りているのか？直接お話しができてよかった」と話されました。



見学者と交流する被爆者

説明をしていると誰かが寄ってきて、大きな輪ができることができました。ボランティアの方の的確で巧みな通訳の助けをお借りして、被爆者はめいっぱい交流することができました。今回の活動では証言された原爆のことだけではなく、原発問題や環境問題、貧困、戦争、国の政策など、質問は多岐にわたっていました。どれも一筋縄ではいかない問題ですが、「とにかく、まず核廃絶を突破口にして、やがては、すべての問題が解決に向かうよう活動を続けるし、継承していきたい」、と被爆者の方はおっしゃっていました。

説明をしていると誰かが寄ってきて、大きな輪ができることができました。ボランティアの方の的確で巧みな通訳の助けをお借りして、被爆者はめいっぱい交流することができました。今回の活動では証言された原爆のことだけではなく、原発問題や環境問題、貧困、戦争、国の政策など、質問は多岐にわたっていました。どれも一筋縄ではいかない問題ですが、「とにかく、まず核廃絶を突破口にして、やがては、すべての問題が解決に向かうよう活動を続けるし、継承していきたい」、と被爆者の方はおっしゃっていました。

・平和首長会議ニューヨーク集会を傍聴しました。

平和首長会議ニューヨーク集会を 11 人で傍聴しました。会場は 70 人で満杯の国連の小さな部屋で、マスコミの取材など熱気がありました。

まず松井広島市長、アンゲラ・ケイン国連軍縮担当上級代表のあいさつのあと、リーダー都市・役員都市の 6 人（タイ・バンコク知事、カメルーン・フォンゴ・トンゴ副市長、田上長崎市長、ノルウェー・フロン市長、メキシコシティー市代表、藤沢市長）よりスピーチがありました。その後「核兵器廃絶にむけた市民社会の役割」をテーマにパネルディスカッションを行い、ニューヨークアピールを採択しました。

被爆者は高齢になっており、生きていच्छるうちに具体的な成果を出さなければならぬ、市民の運動の後押しが必要という話は、まさにその通りと感じました。

※平和首長会議：世界 160 の国と地域の 6600 以上の都市の首長で構成し、その都市人口を合計すると世界人口の 7 分の 1 にもなります。平和首長会議は可及的速やかな核兵器の廃絶をめざしています。



平和首長会議の様子

・国連および各国代表部への要請

今回の代表団派遣では、日本被団協とともに、国連や各国政府の国連代表部を積極的に訪問し核兵器廃絶への要請書をお渡しました。国連代表部のほか、ニュージーランド政府代表部、米国政府代表部、英国政府代表部、スイス政府国連代表部、メキシコ政府代表部、フランス政府代表部、マレーシア政府代表部、日本政府代表部、オーストリア代表部、アイルランド政府代表部の 10 カ国で要請文書を手渡しました。

☆4月29日 4班 オーストリア政府 代表団との面談

オーストリアは核兵器軍縮に前向きな国で、今回もその姿勢が随所にみられました。

「オーストリアは小さな国で冷戦に恐れを感じている」、「会議と実際に被爆地に行くのは絶対に違う。間違って使われた例。証拠は被爆者」、「被爆者と実際話せる機会を持てたことは光栄である」など、被団協代表メンバーも被爆体験を交えて説明し、オーストリアとしても被爆者の支援が必要と考えているとのことでした。



被爆体験の資料を受け取るオーストリア政府代表団

☆4月29日 9班 マレーシア国連代表部への要請

日本被団協・日本生協連・原水協合同でマレーシア国連代表部を訪問しました。被爆者の児玉さんより要請の発言を行い、要請文を渡しました。マレーシア国連代表代理からはあまり楽観的なコメントはありませんでしたが、核兵器廃絶を実現するために、各国代表への要請行動が重要だと感じました。



被団協からの要請書を手渡す児玉さん・真田さん



生協代表からの要請文手渡し

☆4月29日 10班 日本政府国連代表部 佐野軍縮大使に対する要請活動

はじめに各種要請文書が日本代表部へ手渡されました。その後、被団協事務局長の田中さんから、日本政府に対して、①唯一の被爆国として国際社会でリーダーシップをとってほしいこと、②核の抑止としての核の保有は認められず、今の日本政府の認識はまことに遺憾であること、③外国での証言活動の支援を政府からしてほしいこと、の3点が伝えられました。その後、被団協の木村さん、今井さん、濱住さんが被爆体



佐野大使に要請書を手渡す被団協の田中事務局長

験を述べました。佐野大使は、過去から現在にいたるまでの国際社会や軍縮情勢、今回のNPT再検討会議に対する日本政府の態度や認識、方針等を説明されました。

質疑応答や意見交換の場面では、「一刻も早い核兵器の廃絶の実現」を被爆者が要請し、日本政府は「国際社会の情勢の中では難しく、段階的かつ建設的なアプローチが必要であり、その実現に努力していることへの理解を求める」、と回答しました。また、生協代表団の和田副団長は、今回の被爆証言のために1千万円を超えるカンパを集めたことを報告し、また日本政府に対し被爆の証言活動に支援を要請しました。

この要請活動では、今回のNPT再検討会議に対する日本政府の姿勢や方針を理解できたことが、とても意義のあることだと感じました。マスメディアの報道からではわからないことを教えてもらえたように思いました。両者の言い分が食い違うことはあっても、目指している方向は同じであると思います。NPT再検討会議の結果に注目したいと思います。

☆4月29日 11班 アイルランド国連代表部との面談

アイルランド政府に要請書を提出しました。アイルランド政府は積極的に核兵器廃絶を訴えており、友好的な雰囲気で行うことができました。しっかり時間を取れたこともあり、被爆者の方の想いを伝えたり、質問したりすることもできました。アイルランド政府は、「核廃絶の議論をする際には、具体的な核軍縮よりも原点に戻って、被爆者の実相を伝えることで核のリスクを周知させていくことが大切だ」とおっしゃっていました。



アイルランド代表部との面談の様子

面談を通じて、アイルランドの核廃絶に対する強い姿勢が伝わってきました。連帯の力を強め、今後も様々なつながりを大切にして活動を続けていきたいと思っています。

☆4月29日 12班 ニュージーランド国連代表部への要請活動

原水協、被団協、日本生協連の三団体が、ニュージーランド国連代表大使と面会しました。生協代表団の高田副団長から、核廃絶と世界の恒久平和、NPT再検討会議の成功への期待を込めて、要請文を渡しました。また、トムクルーズが主演した「ラストサムライ」のロケ地がニュージーランドであったことを引用し、「あの映画は、最後のサムライを描いた映画である。平均年齢が80歳になろうという被爆者は我々にとってラストジェネレーションである。その願いを被爆者と一緒に要請文を届けに来た」と伝えました。



ニュージーランド代表部に要請文と折り鶴を手渡す高田副団長

4月28日の活動（NY現地時間）

☆5班 イザベラホームでの公開証言活動&交流会

マンハッタン島の北部、ニューヨーク郊外の庶民的な住宅街にあるイザベラホームは、ニューヨークでは最大規模を誇る養護老人ホームとケア付きの住宅です。

証言活動は広いホールで行われました。利用者や近在の人々、スタッフを含め聞き手は50人ほどでした。車いすで参加する方、中には日系の方もおり、100歳を超える方も参加されました。

長崎の和田さん、広島塩瀬さん、被団協の藤森さんが証言されたのですが、証言が始まると、その内容に思わず驚きの声をあげる方もいました。質疑応答では、被爆者の方の証言活動の意義、原発の対応などの質問があり、戦争・原爆・原発への関心の高さがうかがえました。

後半は、食堂で5、6人に分かれてお茶をいただきながら懇談しました。「原爆は間違いだった、謝りたい」とおっしゃる方、「少し前の子どもへの教科書には『原爆は戦争終結のための正しい選択』とされていることに危惧を感じている」という方もいて、世代間の認識の差を改めて感じました。

多くの場に足を運び、世代に関わらず、お互いの想いを伝えあうことにより、相互の理解が深まるということ強く実感する機会となりました。



英語で証言される和田さん



会場の様子



第二部の交流会

☆3班 まきのさえさんのお宅での証言活動

個人のお宅で、大人16人、子ども4人に向けて活動しました。ホールや講義室の活動と比較して、温かく柔らかい雰囲気でした。参加者も身構えることなく、じっくり証言を聞いている印象でした。お子さんにとっては少し難しい話だったか、落ち着きのない様子でしたが、親子で証言を聞くという体験は、今後の家族の団らんの中で平和について話し合う機会が生まれるきっかけになるのでは、と思います。今回のような形式では、大人数に証言を聞いていただくことはできませんが、柔らかい雰囲気の中で、証言者と参加者の距離が近づき、証言内容が伝わりやすかったです。



証言後の質疑応答の様子

☆9班 国連ロビーの原爆展での証言活動(10時~12時)

被爆者のお二人が原爆展で証言しました。見学者には学生が多く、若い方々と交流することができました。直接会話することで、じっくり質問もでき、涙する方もいました。通訳の方と一緒に見学者に話しかけることで、交流が進み、立ち止まり、輪の中へ入ってこられる見学者もいました。



見学者に囲まれる被爆者の児玉さん

☆10班 国連本部ロビーの原爆展での証言活動(12時~14時)

パネルに興味を示した来場者に、被爆者の方々が積極的に証言されている姿が印象的でした。被爆の証言に来場した外国人には、被爆証言を初めて聞く人が多く、とても熱心に聞き入っている様子でした。質疑応答では、被爆者の方から「核兵器についてどう思うか」など来場者に対して質問し、活発な意見交換がされていました。

このような活動を続けることはとても大切だし、国連の中でこうした証言活動ができることはとてもすごいことだと感じました。一方で、日本人やパネル展に来る外国人は、原爆について興味や知識がある人たちです。そうではない人にもっと、原爆のことを知ってもらうにはどうしたらいいか考える機会になりました。



来場者にパネルの説明をする被爆者

☆12班 スカボロー長老派教会での証言活動

長老派とはキリスト教の教派の一つです。スカボローにある教会で、証言活動を行いました。30人ほどの参加者に向けて、箕牧さん、中村さんが被爆の証言を行いました。この活動には、中国新聞社ジュニアライターも取材のため参加しました。

原爆を作成した人がその職を辞し、パイプオルガンの仕事に転職した、GHQに勤めていた男性が、旅行先で偶然出会った広島出身の日本人に土下座をして謝罪した、などのエピソードを交え、「米国国民全員が原爆投下を正しいと思っているわけではない」と参加者からメッセージをいただきました。



証言する箕牧さん

活動に参加された皆さん、本当にお疲れ様でした！